
そのちいさな手で

雪虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そのちいさな手で

【Nコード】

N7863A

【作者名】

雪虫

【あらすじ】

少しづつ恋いしていく、二人で歩いていける。。。ゆっくりだけど、二人きりで何かをしたい。。。そんなかんじ？

ちいさなその手で

手を広げる、その手に、その小さな手に、いったいなにが残るだろうか……。

僕は恋をしている。同じクラスの相田 恵さんに、クラスでは目立つほうではないが、うちのクラスは『当たりクジ』と言われるほど、綺麗な人、かわいい子が多い。だから目立たないのかもしれない。

そんな恵さんに告白されたのはホント最近の事で今でも信じられない。僕ははつきり言ってモテる要素など一つもない……いや一つくらいは……。

そんな感じの僕に、生まれて初めての彼女ができた。

いまさつきモテる要素はほとんど無いと言ったが、男にモテる（別に変な意味ではない）傾向があつて友達が多い。

その中でも親友と呼べる男、林 壱。小学校三年からの付き合いで今年で五年目だ。

壱ははつきり言ってモテる。何度も、僕好きな子ができたんだ、壱にと言うと、「悪い、俺そいつから告白された」

ということが何度もあつた。壱が嘘を言わないのが残酷に感じた。そして、これがあるたびに僕は友達をやめようと何度も、何度も思ったが、結局自分が情けなくなり、友達のままにいる。

壱と友達をやめるのは無理なことのような気がした。

「なあー、付き合つて何だと思う？なんつつか、恋ってなんかなく。」

「おい、どうしたいきなり。っーか今が一番ラブラブな時期じゃな

いのか？お前らいきなりつまづいてんのか？それもかなりでつかいやつに」

「いや・・・つまづいたのは僕だけかな・・・？」

「はあ？言ってる意味がわからんぞ」

「いやなんといえますか・・・こう・・・だから・・・根本的な事というか。ねえ？ほら、分かるでしょ？」

「いや分かるんだけどさ。その辺はスルーしない？」

「でもさ？」「でもとかも無しでさ・・・。あっそーだ、二人で話し合ってみればいいじゃん」

「え！？恵さんと僕が？」「他に誰がいるよ！！」

「えっでもそれなんかいきなり別れ話っぽい気がしますけど」

「大丈夫だろお前等なら。それにさ、そういうのが案外付き合うつてことかもよ？二人で愛を探す、みたいなさ」

と僕は舌にうまく丸め込まれた気もしつつ、舌に言われた通りに、いつも帰り道の途中にある公園で、少し話してから家へと帰る。

その公園で、僕は話すことにした。最初はいつも通りに学校であった事、少し早い気がするけど進路の事、自分の事、家の事。

二人の距離を少しずつ少しずつ縮めるために。

そして僕は最後に

「あかさ・・・僕最近よく思う事があるんだ。」

「えっ？」

「手を広げてみて、この手に何が残るのかなって。恋ってなにかな？つて。変でしょ？」

「ううん、変じゃないと思う・・・けど」

・・・ゆっくり時間が流れた。時間の早さがいつもより遅く感じた・・・僕たちしかいないこの公園で。

「もしかして・・・疲れた？・・・私と・・・？」

先に口を開いたのは恵。彼女が言葉に詰まった。

「いやそうじゃないんだ。疲れたとかそういうんじゃないって

・・・話したかった。僕がいつも、何を考えているのか、少しずつ

しか進めないから、少し・・・少しでも知ってほしいし・・・知りたいたいんだ・・・だから、話した」

「はーよかった。私・・・あなたのことが好きだから」
胸をなでおろし、優しい笑顔でそういわれた。

僕はその笑顔が好き。そんな言葉を彼女にかけれずにいる。本当のことを。

本当の事は、恥ずかしかった。思いが外に出れば力を持つから。みんなが持っている魔法、言葉は少し恥ずかしいのかもしれない。

「顔、赤いよ」

彼女の言葉の力は僕に恥ずかしさを・・・大切な思いをくれる。

「大丈夫？」「えっ。うん」

また、ゆっくりと静かな時が流れた。公園の木々の葉が風に吹かれ、舞い落ちる。

葉が全て落ちる。それはまた次の季節がやってくる。自然のサイクルの中に人がいる。

だから人も、別れと出会いも廻って行くのかな・・・。

はっ、また一人で考え込んでしまった。うっ、なんだかツライ。

「ねえ、本当に大丈夫？さっきからぼーっとしてるよ？」

「うん。平気。癖だからさ」

「あっ・・・あのね？私も少し考えてみたんだけど・・・聞いてくれる？」

「・・・うん！」

心からの笑顔。彼女は僕にとって本当に大切なんだと感じた。

「手を広げる前の手の中つてさ、目をつむったときと同じだと思うんだ・・・だから目をつむってみて・・・」

「？・・・うん」「何か見える？」「いや何も見えないけど」

「見えないのは、ずーっとずーっと先に何かがあるから。

無限に広いところでは、先の先は目では見れないの。だから手を広げたとき、目を開けたとき、それは、光がさした無限。

手に残るのは明るい、けど先の見えない無限だと思うんだ。

・・・未来も、恋も。そして人も地球もみんなみんな、自分の無限をもってるの。

で、どうかな？こうならいいなって考えてみたんだけど」

「僕もそのほうがいい。未来も恋も地球も、全てが無限なら、みんなが幸せになれるから」

彼女の言葉は、大切なものを、幸せを、温かさをくれる。少しずつしか前に進まない恋でも、少しずつしか前に進めない僕たちの手にも、

無限が広がっている。

手を広げる。

その手に、その小さな手に、無限が広がり、残る。

だから僕たちは少しずつでも、前を向き、まっすぐに、恋をする。

(後書き)

初投稿でどうなるかわカラシが、やってみたという感じに・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7863a/>

そのちいさな手で

2011年1月27日03時37分発行